http://www.naniwa-rojo.com/

なにわ路情

野宿考ジャーナル
17号（季刊）

「なにわ路情」がめざすもの

- 野宿生活者の生活や声をとりあげ、ともに考える新聞です。
- 脱野宿のきっかけとなるような紙面づくりを心がけています。
- 今までのこと、そしてこれからのこと、いっしょに考えていきませんか。

お願い!! ご意見きかせてください

「虹の連合ホームレス全国調査」が始まります

くらし応援室　佐々木敏明

秋の色あいが濃くなってきました。こんにちは。お元気ですか？　編集スタッフの佐々木です。季節がよりきびしくなる中、じゅうぶん健康には気をつけていただくように。

一七号をお届けいたします、と同時に今回、路上で生活する皆さんにお願いがあります。「ホームレス支援自立法」が施行され〇七年で五年目になります。一〇年間の、あらかじめ期間が決められた法律（時限立法）ですので、来年が中間の見直し期にあたるわけです。

来年早々、政府・厚生労働省では、野宿者の実態調査を始めようとしています。従来。政府・厚生労働省の取り組みが、真に野宿者の実情を把握してきたのか、野宿者への大切な視点が抜け落ちていたのではないか問われています。そこで、全国的に野宿者を支援する団体やＮＰＯ、市民団体などたくさんの人たちが、政府・厚生労働省とはちがった観点から、「ホームレス問題全国調査」を始めてみようということになり、協力体制を作ることになりました。

この調査は、「虹の連合ホームレス全国調査」が中心となり、今後の政治的中心課題に位置づけた運動として、脱野宿のための調査に力点をおき活動を始めようとしています。私たち「なにわ路情」編集部も「虹の連合ホームレス全国調査」の理念に賛同し、野宿者や元野宿者への聞き取り調査に協力することを決めました。近く皆さんがいる場所に、支援者や調査員がお邪魔し、聞きとりをさせていただくことになるかもしれません。その時は、政府・厚生労働省とは異なる、真に皆さんが心に思っているご意見をお聞かせいただければ嬉しいのです。

いろいろわずらわしいことをお願いして申しわけありません。これからの野宿者問題を真剣に考える意味でも、是非私たちの気持ちをご理解ください。現場でお会いした節はよろしくお願いいたします。

主催／虹の連合ホームレス全国調査事務局
協力／なにわ路情編集部

10・29 野宿生活者支援統一行動「健康・歯科・法律・なんでも相談会」のお知らせ

昨年開催してご好評をいただいた健康、歯科、法律、年金や労災などの「なんでも相談会」を今年も行います。大阪市内の野宿生活者の健康や生活を支援する「野宿生活者支援統一行動」として、一〇月二九日（日）に三つの会場で開催します。大阪府保険医協会や歯科保健研究会、国境なき医師団日本、大阪弁護士会人権擁護委員会、その他ボランティア団体や個人などの協力で行われます。

今年は各種相談会とあわせて、温かい食べ物（具だくさんスープなど）と衣服をお配りします。昨年は胸のレントゲン撮影やおにぎりの配布を行いましたが、西天満で検診を受けられた方からは「とても良かった。またやってほしい」「先生（医師）にやさしくしてもらったのは初めて」という感想をいただきました。今年も皆様に喜んでいただけるような企画にしたいと思いますので、是非ご参加ください。

●実施日
二〇〇六年一〇月二九日（日）　午前九時～一二時

●相談会の会場
第一会場：西天満・旧大阪弁護士会館前（天満警察の近く、最寄り駅・地下鉄「淀屋橋」）
第二会場：桜之宮公園（源八橋東詰南側広場、最寄り駅・ＪＲ「桜ノ宮」）
第三会場：毛馬公園（公園南西側「飛翔橋」下、最寄り駅・地下鉄「天神橋筋六丁目」）

●当日の内容
①各種相談会（医療・歯科・法律・生活・福祉・居宅・就労などについて各専門家による相談会をします。）
②食べ物・衣料提供（温かい食べ物、服などを配ります。）

●事務局
大阪府保険医協会・ＮＰＯヘルスサポート大阪・国境なき医師団日本・大阪民医連
歯科保健研究会・大阪弁護士会人権擁護委員会

紙面

1	野宿地での聞きとりにご協力のお願いです	3	京都で医療・よろず相談会ーきぼうプラザの主催で
1	10/29「健康・歯科・法律・なんでも相談会」のお知らせ	4	全国行脚レポート、四国・松山篇
2	全国行脚レポート、横浜・寿町篇	4	マンガ「ナナコロビヤオキな人々」
2-3	連載：路上から路情へ（第三回）	4	編集後記

発行元
なにわ路情編集局
〒530-8090　大阪中央郵便局留「なにわ路情編集局」係
tel　080-3767-7989
e-mail　rojoinfo@zap.att.ne.jp
http://www.naniwa-rojo.com/
郵便振替口座番号
00900-5-222740　なにわ路情編集局

全国行脚レポート　四国・松山篇

八月下旬、夏目漱石の小説『坊ちゃん』の舞台であり、道後温泉の湯治客も多い愛媛の松山を訪ねました。四国は、観音霊場八八ヶ所を巡礼するお遍路さんでもまた有名ですね。その歴史は古く、平安時代の終わりごろからはじまったようですが、庶民に一般的に広まるのが、江戸時代に下ってからです。

ここには、お遍路さんへの「おせったい」という独自の文化が残っています。みかんやお餅、草履や路賃を手渡し、家に泊めてお風呂にも入れる善根宿という風習。また、注意を払えば、道中で行き倒れた人たちを丁重に葬った遍路墓というものも、路傍で見かけることができます。今でこそ、バスや自家用車で廻ることもできますが、その昔は命がけの行程だったのですね。

野宿のスタイルには定住型と移動型があって、ブルーシートなどを使って小屋を作る人たちと、ダンボールや新聞紙、あるいは寝袋にくるまって休む人がありますが、ここ四国には県をまたがった長距離移動型・・・まさにお遍路さん型の野宿者がおられるということが特徴的です。

その五一番札所にあたる石手寺で、ユニークな活動をされているご住職にお話しをうかがってきました。ご住職のお歳は四〇代後半。学生時代は、セツルメント活動をされたり、また阪神淡路大震災でボランティアを経験されたりしました。

先代（お父さん）が入寺されてから今日まで、門をたたいたお遍路さんの悩みにずっと耳を傾け続けて来られたお寺だそうです。長期間にわたって逗留していく人も後を絶ちません。そして、これらの人たちをみな修行者として受け止め、実際、その中からお寺の職員として採用されたり、お弟子となって他所のお寺の住職を任された方もおられるとのことです。便宜的に「ホームレス」とか「障がい者」という言葉を使うけれど、そういうくくり方は、一種のレッテル張りなのではないかとも言われました。（という考え方を前提として、この後の記事もお読み下さい）

二〇年ほど前は、特に口コミで精神障がいを持った人々が居場所を求めて来られ、常時四、五人は宿泊されていたそうです。最近では、そういった人々の受け皿として、作業所を作ろうと考えられたこともあったのですが、障害者自立支援法が出来てから、そういう施設はこれからうまく行かないという知人のアドバイスで、断念されたそうです。

ホームレスという状態の人々が増えてきたのをひしひしと実感したのが、三年前の冬の時期。けれど、年末から年始にかけては初詣でや節分でお寺が忙しく、声をかけた知人たちも参加をためらわれたということで、一時は支援をあきらめておられました。それでも二年前からは、松山市内の石手川河川敷などに毛布や寝袋を配って歩かれ、活動を開始。

そんな中から、愛媛大学の先生・学生さんを中心とした団体、「オープンハンドまつやま」さんとも出会われ、協力体制のもと、昨年の一〇月にお風呂と食事のおせったいが支援メニューに加わりました。この施浴（せよく）のおせったいは、境内にある修行僧のための入浴施設であった甲申堂という建物で行われ、今年の五月まで続けられました。月に一、二回開き、当初一五人ほどの利用者があって、その中から、身も心もさっぱりして、身辺の整理がついたのか、生活保護の手続きを取って畳に上がる人たちが出てきたそうです。

現在は、市内に一〇〇人以上いた野宿生活者も、行政の対応や先の支援団体さんの活動の成果もあってか、二〇人ほどに減ったのですが、より問題が見えにくくなって来たのではないかと言われます。格差がますます開くことをよしとするような社会の意識や構造が変化しない限り、お寺の定員や力量には限界があり（境内は約一万坪、宿泊できる大広間は百畳敷きなのですが！）、膨大な予備軍を前にひるむばかりで、このような活動をするお寺が増えてくれることを願うばかりですと強調されたことが印象的でした。（か）

石手寺甲申堂

石手寺三重の塔

松山市役所前地下駐車場
（ここは夜回りの重点地区）

ナナコロビヤオキな人々

by ありむら潜

■編集協力（有）Irvisible（イン・ビジブル）http://www.irvisible.net/・（有）地域・研究アシスト事務所 http://www.cr-assist.net/

THE BIG ISSUE JAPAN ビッグイシュー日本版

ホームレスの仕事をつくり自立を応援する、ビッグイシュー日本です。
雑誌販売に興味ある方は下記までお問合せ下さい。

■連絡先：
06－6344－2260
■住所：
大阪市北区堂島2-3-2堂北ビル４Ｆ

b. mixes
BIKOH
Industry Corporation
http://www.bikoh.biz
就労支援をNICEと協働に応援します

編集後記

全国の支援者との交流報告として今号では横浜・松山の事情をご紹介します。引き続き地方都市の状況紹介を予定しております。また大阪で二度目の「野宿者支援統一行動」も行われます。引き続き幅広いご協力をいただけますようお願いいたします。（け）

全国行脚レポート

横浜・寿町篇

日本の三大寄せ場といえば、大阪・釜ヶ崎、東京・山谷、そして横浜の寿。その寿の労働センターの敷地に、端正な顔立ちのお地蔵さまがお祀りされています。これは、この町で亡くなった人々を供養するために、今から三〇年近く前、徳恩寺の先代のご住職とそのお弟子の方がこの町周辺を托鉢して集められた浄財で建てられたものです。今年のお盆に、私はこのお地蔵さまの前で勤まる無縁仏供養に参列する機会に恵まれました。

さて、午後から始まる法要を前に、お焼香に並ぶ人は、ざっと一〇〇人ぐらい。寿で支援活動をする人たちや地域の住民と思われる人が四割、残りの六割が現役労働者や元野宿生活者の人たちといった感じでしょうか。先代のご住職と息子さん二人、そして剃りたての頭が初々しいお孫さん四人のお勤めで、真言陀羅尼（ダラニ）や般若心経などがあがり、寿の町にしめやかな時が流れました。

またこの日は同時に、徳恩寺のお檀家さん三〇人のボランティアによる、恒例のカレー炊き出しもありました。手際よく八〇〇食が用意され、二回並ぶ人もあってか、あっという間に品切れに。私もいただきましたが、夏向けにスパイスがぴりっとよく効いた大人の辛さ。とてもおいしくて、大満足でした。

せっかく横浜まで来たので、青葉区まで足を伸ばし「千秋の丘」もお参りしてきました。この「千秋の丘」とは、徳恩寺の裏山の中腹にある、労働者の人たちのための共同墓地です。二二年前、寿日雇労働者組合の副委員長だった方が労災事故で亡くなり、ご両親がお墓を建てようとご住職を訪ねた折りにふともらされた、「息子は、寿の仲間が命終えた後の住処について、常日頃、心を痛めていました」という言葉がきっかけとなって、建立されたものです。

寿で亡くなる人の数を正確につかむのはとても難しいそうです。というのも、官報、福祉事務所、保健所、警察署など管轄するエリアと対象がそれぞれ違うので、発表される数もマチマチ。けれど、おおよそ年間一〇〇人から一五〇人の方が亡くなると見て間違いないでしょう。

その中から、寿日労に関わりあった労働者をはじめとして、今でも年間一〇人くらいの方の遺骨が納められます。お盆やお彼岸だけでなく、普段の日からゆかりのある方たちが花を手向け、お香の香りが絶えず、死者と生者が向き合う貴重な場所となっています。墓碑銘に、お地蔵さまのことも含め、その由来が記されているので、参考までに全文をあげておきましょう。

仲間ら　声なく　いく秋ぞ　経し

見えざる導きにより、寿町に徳恩寺との縁が得られ、絆の中で師弟による寿町供養塔建立のための托鉢が始まり多くの人々の支えにより、慰霊のお地蔵さまが街の一角に開眼された。来し方を振り返れば、町の仲間の多くは病院から無縁墓地へと手際よく運ばれて姿を消し、住民の気持ちには寂寥感が積もるばかり。無縁さんでない自分たちの魂のしずまる処をお墓をとのみんなのひそやかな願いがいつしか、計らざるあつき心の集まりとなり今日茲に完成した。みまかりし魂のまずしさもなく、むさぼることもなく、おろかさもない、大いなる大地の神々に抱かれながら、千秋の安らかな眠りをこの丘に得んことを祈念す。　合掌

命の灯　今消えんとす　子の眉の　あまりに黒く　たくましくもあり　母（か）

カレー炊き出しの準備

共同墓地・千秋の丘

無縁仏供養

●連載　路上から路情へ（第3回）

振り返り今思う PART2

永山渡（ペンネーム）

僕は今まで路上生活者も認知する事が出来ませんでした。どの様な理由があるにせよ、路上生活に陥ってしまう事の責任は本人にあると思っていたからです。当事者にもなった僕がこの様に思えていたのは、自分自身が昔も今も己の完成と閃き、そしてラッキーだけで生きているという自覚が強かっただけであって、大半の方に自己責任であるという考え方は酷かもしれないと思い始めています。個人的な想像と考えですが、路上生活者を十把一からげには出来ません。しかし大半の方が僕なんかより真面目に努力をして生きてこられた人生の先輩だと思います。おそらく高度経済成長期に活躍をなされ、頑張れば皆がそれなりに生活が向上していた一時代を築きあげてきたのに、バブルが崩壊して不況の時代になると、倒産やリストラ等で仕事が奪われ、それに伴い住まいも失ってしまった方が多数おられる様に思います。住まいを失う前は、おそらく職探しに奔走した事でしょう。しかし年齢的な事等で職につけず、しだいに心がおれて最終的に路上生活が始まってしまったのでしょう。そうなると更に職探しは難しくなったはずです。この様な方々に自己責任だから一から頑張れというのは大変酷な事だと思います。だからといって同情や哀れみも受けたくないと思っていると感じます。

僕の場合は幼い頃から両親とうまくいっておらず、早く家を出て生活をしたいと願っていました。詳しくは書きませんが僕の生まれる前に親は流産をしており「本当はお前は、予定にない、いないはずの子供だった」と言われた事があります。ここには居場所が無いと思っていました。高校の中退を期にやっと家を出て、生きていく為に仕事をはじめたのが社会に出た第一歩でした。「感性と閃き」は、言い換えればただの「わがまま」にしかなりませんが、己の思うがままに行動してきました。ラッキーな部分は色々な方との出会いです。様々な方に出会い助けられてきたから今も僕は生きていられるのだと思っています。だから強がりかもしれませんが、路上生活に陥ってしまった時も何かのせいには、出来ませんでした。正確には、それをしてしまうと今までの己の生き方を自分自身で否定してしまう事になるので自己責任だと思っていました。それにまだ30代ですし、楽観的な性格をしているので何とかなると信じていました。

現在も路上生活に陥ってしまっている方の年齢は様々でしょうが、ここに年齢の数だけ生きてきた過去があります。色々な思い出や後悔もあるでしょうが、おそらく人生を否定されたくはないはずです。だから本音は隠して言葉では何かのせいにしているだけの方も多くいるはずです。過去にとらわれず、この瞬間を受け入れてくれる人や場所が多くあれば良い様な気がします。路上生活者同士は、あまり過去の事を話してない気がします。だからお互いに、かたまって助けあって生きているのでは、ないでしょうか。全て個人的な想像で路上生活を正当化するつもりは、ありません。僕には知識も学もないので、どの様にしていけば良いのか分かりませんが、ただ何となく現状に安らぎがあり、それに満足をしているのであれば、路上生活も社会の一部として認知する事が良いのかもしれないと感じ始めています。それは体の居場所が無いだけで、一生懸命に生きている事に何らかわりがないからです。しかしきっと、路上生活者とそうでない人との良いつながりや、関係づくりが出来ればそこから信頼がうまれ、何かしらの仕組みが出来れば路上生活者の数は軽減できるのでは、ないでしょうか。

京都で医療・よろず相談会

―きぼうプラザの主催で

ペンネーム　三條不浪

九月三日、京都駅に近いキャンパスプラザでは、大阪保険医協会の助けを得て、医療・よろず相談会が開かれました。当事者が約四〇人、ボランティアや支援団体から約三五人。当事者のきぼうの会は受付や案内で活躍。歯科一四人、内科一二人、生活福祉相談一二人、アンケート三七件、フード三八食と、盛会でした。ただ、重病者も判明。このような活動の重要性が再認識されました。今後も、大阪勢と連携しながら活動を継続し、提言につなげるつもりです。

当事者から、手記が寄せられました。ボランティアのおせっかいは、自戒したいもの。当事者も、双方を冷静な目で見ておられます。次をご覧下さい。

「公衆トイレの出入口で擦れ違いざまに、いささか哲学的な言葉を投げ掛けられ、面喰った事がある。相手を見れば、浮浪者姿である。が、こういう人物を一概にホームレスと定義づけてしまってよいものか―逆の場合もあるからである。一応は職に就き住む処があっても、そのココロの中、精神構造に於ては、„立派に„ホームレスという人物も多かろうと思うからである。

この問題は、他者がいくら「外」からつついてみたところで解決は見ないだろう。ましてや「内」の事は、当事者にしか答えは出せない。（出せるかはともかく…。）

「弱者」も、けっこう居心地がよいものではある。いさかタガがゆるんではいるのだけれど―一筋縄ではゆかないという事である。」

きぼうの会に、改めて感謝します。当事者と支援者を橋渡しした力は、大きいものがありました。

歯科相談中

現地事前打ち合わせ

最後に生活相談があり，お弁当を配りました

医療・歯科相談